



Title	アートと趣味縁の拠点における「非クリエイティブクラス」のハーフシフトについて：札幌市の0Y0Y0ゼミの事例から
Author(s)	加藤, 康子
Citation	文化経済学, 13(1), 36-44
Issue Date	2016-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/67654
Rights	本論文は、文化経済学会<日本>より許諾を頂いて転載するものです。
Type	journal article
File Information	kato01.pdf



アートと趣味縁の拠点における「非クリエイティブクラス」の ハーフシフトについて —札幌市の OYOYO セミの事例から—

加藤 康子*

日本語要約

人間の創造性こそが都市経済の今後の担い手であるとする創造都市論において、創造人材とされるクリエイティブクラス以外の市民の潜在力については、ほとんど注目されて来なかった。本研究は、都心でのアートと趣味縁をテーマとした市民有志による活動の場が、クリエイティブクラス以外の市民層が各自の潜在的な創造力を発現させる契機となっている事例に着目し、敷田の「ハーフシフト」概念を応用しながら、その機制（メカニズム）について事例からの分析を試みる。

キーワード

創造都市、クリエイティブクラス、趣味縁、ハーフシフト、エンパワメント

Summary

Creative city theory points out that human creativity plays a significant role in city economics. Creative Class has been focused as creative human resource, but as to community people other than Creative Class, their creative potentiality has been ignored. This study focuses on a case of "OYOYO ART CENTER SAPPORO." In this case, people other than Creative Class initiate their art and leisure activities in the heart of a city to empower their own individual potentiality and creativity. The study gives an analytical examination to the case in terms of its mechanism by applying "Half-Shift," a concept introduced by Asami Shikida.

Key Words

Creative City, Creative Class, Relationship Among Leisure-Activity, Half-Shift, Empowerment

1 はじめに

20世紀の中心産業であった自動車などの製造業の衰退を背景に、都市経済のパフォーマンスを向上させるのは、工場誘致ではなく「創造階級（Creative Class）」の人々の創造性であるというリチャード・フロリダ（Florida, 2002 = 2007）の創造都市論が、1990年代から日本でも注目されるようになった。佐々木（2015, 120ページ）はこの創造都市論について、製造業をベースとしたフォードイズム型都市の衰退に対して、知識経済中心の都市経営で「文化と創造性による都市再生」であると述べている。

このクリエイティブクラス、つまり人を重視した創造

都市論については、佐々木（2012, 47ページ）はじめ多くの論者が、米国の都市研究者ジェイン・ジェイコブズの論考を源流の一つと位置付けている。ジェイコブズは、ニューヨーク下町のコミュニティの活気と多様性を例に、当時の機能優先の都市計画を都市生活者の視点から批判し（Jacobs, 1961 = 2010）、イノベーションを推進する原動力は、大企業や起業家ではなく、多様な才能と専門性を持つ人々が集中する大都市の社会そのものであるとした（Jacobs, 1984 = 2012）。

ジェイコブズが指摘した都市の多様性を受けて、フロリダ（2002 = 2008）は、アメリカの都市再生の要因は「創造性」であると主張した。フロリダが提唱したクリエイティブクラスという概念は、創造都市論とともに世界的に共有された。一方ユネスコ（UNESCO、国際連合教育科学文化機関）は、創造的・文化的な産業の育成・強化によって活性化を目指す世界の都市の戦略的連携や交流

* 北海道大学大学院 国際広報メディア観光学院 博士課程

E-mail: kayanet@mtf.biglobe.ne.jp

原稿受理月日：2015.9.30

掲載可能原稿受理月日：2016.1.20

を支援するため、「創造都市ネットワーク」事業を2004年に開始した。2015年12月現在、世界69都市、日本では札幌市や横浜市など7都市¹⁾が、それぞれの領域に立脚した都市戦略を進めている。

このようにクリエイティブクラスの人材の重要性は広く認識されているが、フロリダは特定の職業階層の創造性だけを称賛したのではない。フロリダ(2002 = 2007, 序文1ページ)は、クリエイティブクラスを「科学者、技術者、建築家、デザイナー、作家、芸術家、音楽家、あるいはビジネス・教育・医療・法律などに関わる職務に就き、その中心的な部分においてクリエイティビティを発揮することを求められている者」と広く定義している。つまり、フロリダのクリエイティブクラスとは、本来は可視化されにくい人間の創造性を、都市の経済的盛衰との関連における統計データに基づいてあえて明示した「職業分類」である。その後の「クリエイティブクラスの重視はエリート主義」とする批判に対して、「人はだれしもクリエイティブである—これがシンプルかつ基本的な私の主張だ」とフロリダ(2014, 序文4ページ)は主張している。佐々木(2001, 217ページ)も、日本に創造都市論を紹介した当初から「本来、地域のすべての住民が、老人であれ、子供であれ、障害者であれ、失業者であれ、自由に自己の精神的身体的能力を発揮する機会を保障することが『創造の場』の重要な条件となる」と述べている。

しかし、創造都市の成功事例が強調されるのと並行して「クリエイティブクラスの人材誘致」に創造都市の議論の比重が置かれるようになった。こうした状況に対し、地域人材の活用を目指すべきであるのに、創造的な人材の地域への誘致に論点がすり替えられ、地域住民の創造性を高めることの優先順位が低くなる可能性がある」と長田(2010, 102ページ)は批判している。実際、クリエイティブクラスに分類されない人々の中にも、本業以外で創造性を発揮する活動を楽しんでいる人々が存在する。

そこで本研究では、こうした人々が持つ創造性やその可能性が、本人および社会にとっても重要であるとの認識から、クリエイティブクラス以外のすべての人々を「非クリエイティブクラス(Non Creative Class)」として捉え、創造都市論での創造性に対して、この層が持つ意味を明らかにすることを目的とした。こうした非クリエイティブクラスがアートや趣味縁をテーマとして定例活動を行っている活動拠点到に注目し、そこで起こっている創造性発現のメカニズムについて分析を試みた。

本稿の対象事例は、市民有志が札幌都心部の古いオフィスビルの一画を借りて自主運営している「OYOYO(正

式名称: OYOYO まちアートセンター、発音オヨヨ。以下 OYOYO と略称)」である²⁾。ここでは事務員や作業員、主婦、学生などのメンバーが日常運営や企画など活動の中核を担っている。彼らの職業属性は、フロリダによれば「サービス・クラス」と「ワーキング・クラス」であり、さらにフロリダの職種分類の対象にならない未就労者(主婦と学生)が加わっている。彼らは本業で創造的活動をしているとは見なされない「非クリエイティブクラス」である。しかし OYOYO ゼミにおいては全員が創造的な活動を行っており、本業では発現の機会を持てずに潜在させてきた創造性を、当人が望む形で発揮し社会に還元している。これは参加者には、本業とは別に副次的な活動によって拡張された自己実現と社会参加であり、結果として職場を含めた生活全体がより充実するといった副次効果を派生させている。またオフィスビル周辺のエリア活性化も起きている。つまり、フロリダの主張する本業における創造性の発揮ではないが、余暇時間を活用して創造性を発現させ、それが職場を含めた社会にもプラスに作用している例であると考えられる。こうした事例の一部は、敷田(2010)が提唱した、職場の隣接領域において社会的な活動を行う「ハーフシフト」に該当する。また敷田のハーフシフトに当てはまらない事例についても、著者はこの概念を発展させ、職業属性を問わず万人が創造性を発揮する新たなモデルとして「第2のハーフシフト」を提案する。

なお本研究の方法は、参与観察に基づく質的分析と資料調査である。2010年冬以降、著者が OYOYO 美術部(当時、現在は OYOYO ゼミ)の正式メンバーとなって収集した活動記録やインタビュー、アンケートなどの資料に基づき分析と考察を行っている。

II 対象事例「OYOYO ゼミ」の概要

1. OYOYO の設立

札幌の中心部では JR 札幌駅前の再開発に伴い、大通地区から札幌駅前地区へと2015年現在も都心としての比重が移行中³⁾である。2000年代後半には大通地区のあちこちに長期の空室が目立つようになり、特に築年数を経た物件にその傾向が顕著であった。そうした中、非営利の市民団体がオフィス街の空室を借り受け、リノベーションをした上で、アートの活動拠点などに再利用する動きが活発になった。そうした拠点群の中でも唯一「部活制」を採用して運営を始めたのが OYOYO である。

OYOYO は、2008年5月、大通地区の雑居ビルに市民有志による自主運営かつ非営利のまちづくり・アートの活動拠点として創設された。設立時は「大人の放課後」

をキャッチコピーにメンバーを公募し、学校の課外活動を模した「部活制」を組織運営の基本とした。図書部、文化部、放送部など、参加者が希望する部活に所属し「部員」として活動する。これは部員が支払う部費を毎月の固定収入とし、助成金に頼らず自立運営が可能となるよう構想されたモデルであった。活動開始後、何度かの制度変更を経て、2012年5月に当時活動していた美術部、写真部などの部活は「OYOYOゼミ」として一本化された。今日では、空間を指す場合はOYOYO、そこを拠点とする集団を指す場合はOYOYOゼミと正式名称を呼び分けている。

初期のOYOYO設立に関わったのは、当時の大通地区の衰退と空洞化に深刻な危機感を抱いていた商工関係者、まちづくり関係者らだった。彼らは、2007年に現在のOYOYOの空間(床面積168.69㎡)が家主の逝去によって空室となったことを受け、「まち魅力プレイヤーズ会議」を設立し、メディア、映像、写真、アートなど各領域の活動主体となることを期待された人々とともに、OYOYO設立構想を具体化していった。つまり、創立に関わったのは、フロリダ(2002=2007)のいうクリエイティブクラスであったと考えられる。構想段階から、参加者が楽しく自主的に参加することで、自然と地域活性化が起るような仕組みづくりに配慮がなされ、「部活制」も組み込まれた⁹⁾。実際に部員の公募が始まると、年齢も所属も多彩な市民らが都心に「自分の居場所を持とう」と集まってきた。

現在のOYOYOゼミのメンバーは、国家公務員、元自衛官、美術やサブカルチャーなどのプロデューサー、学生、主婦、ダンス教師、会社員など20代から50代までの約10名強である。イラストや写真などの創作活動を行う者と、鑑賞を専門にする者が混在している。正式メンバー以外にも、OYOYO内に併設されているカフェの常連客、企画に応じて参加する外部講師や一般参加者など、外部からの一時参加者も多い。

メンバー全員が同額の部費負担を行うため、運営や企画では全員が原則対等な発言権と参加権を持つ。重要案件は定例会の参加者全員で協議し決定を行う。企画や提案は誰でも自由に行え、承認されれば全員が実現に協力する。参加や提案は権利であっても義務ではなく、仕事の都合や興味に応じて各自が望む形と頻度で参加している。2012年頃からメーリングリストで毎週一回の定例連絡が行われ、最新の決定事項や活動予定について、前回の欠席者を含めた全員が情報を共有するようになった。

2. OYOYOゼミの活動内容

2015年現在、OYOYOゼミでは、毎週1回夜8時から2～3時間の定例活動を行っている。主な活動プログラムは、打ち合わせ、クロッキーや手芸等のワークショップ、部員の1人が講師となって得意分野を解説する部員相互レクチャー、その都度テーマを決めて全員が自慢の一品を持ち寄って思い入れを語る「お宝鑑賞会」、全員で近所を散策するマチ歩き、外部講師を招いての公開講座、夏冬一回で恒例化してきた企画展、電子書籍を含む各種出版物の製作などである。これらの活動スケジュールの調整は、定例会の「打ち合せ」で行われる⁹⁾。以下に2015年夏から秋の活動内容を紹介する。

開催日	区 分	開 催 内 容
7月18日	ワークショップ、企画展	Tシャツ展制作の公開ワークショップ。ステンシルや刺繍、アイロンプリント等を準備
7月22日	公開講座	飯島 実氏による「Flying twenties (1920s) 大正から昭和の時代のヒコキあそび」。制作指導と実演
7月28日	打ち合わせ	Tシャツ展のための臨時打ち合わせ
7月31日	企画展	Tシャツ展の搬入
8月1日	企画展	Tラボ～Tシャツ合同展～(創作Tシャツを展示)～2日
8月6日	打ち合せ	打ち合せ
8月13日	お休み	お盆休み
8月20日	打ち合わせ	Tシャツ展振り返りと打ち合わせ
8月27日	公開講座	北大の研究者、張慶在氏による「STAR WARS: チュニジア編」。「エピソード4、1、2」のロケ地チュニジアの聖地巡礼を報告
9月3日	打ち合せ	打ち合せ
9月9日	公開講座(共催)	増淵敏之氏によるトーク・ワンダーランド Vol.1 「黒ちゃんの知らない狸小路—1960～1970」
9月11日～13日	ホールレンタル(外部企画)	「下品で最低」4。ドラクエ企画主催。OYOYOゼミメンバーが自社で主催する人気企画。
9月17日	打ち合せ	打ち合せ(ホールレンタルのためカフェにて)
9月24日	公開講座	(株)ラヴワークスサウンド代表 伊藤 明氏による「真空管サウンドセミナー」。ハンドメイドスピーカーで聞く秋の音響夜会

上記のように、OYOYOゼミにおける「打ち合せ」の開催頻度がかかなり高い。運営や企画に必要な議論はもちろん行う。しかし、新規に獲得したコレクション自慢や最近見た映画や舞台の感想、帰省報告などの雑談に費やされる時間も多。こうした運営上のノイズとも見える冗長性の許容は、見方を変えれば、全員に発言内容と発言機会を選択する自由があることを具現化した姿である。また、議論の文脈からの逸脱の許容、具体的な企画や創作に落とし込まれる以前の曖昧な状態でのアイデア共有、私的体験の尊重などの反映をもここに見ることができる。筆者はこの雑談の恒例化に、個々の創造性を集団で活性化化するOYOYOゼミの特性が顕著に現れていると考えている。実際、雑談で出た発想を核にして作品を制作したメンバーも居り、ノイズの許容が個々の自由な発想や創造性に肯定的に作用していると考えられる。また、打ち

合せ以外の活動部分、ワークショップや企画展、公開講座には各自の得意分野や人脈が持ち込まれることで実現しており、内容的にも手工芸、観光研究、地元商店街の歴史、音響技術など多様な展開が見てとれる。

III OYOYO ゼミの活動の分析

1. 個人資源の社会化

前章で見たように、OYOYO ゼミの活動の形式やテーマは様々だが、いずれも趣味やアートを入口にした参加者全員によるコミュニケーションとしてデザインされている。メンバー個々に蓄積された知識、技能、感受性、経験などの人的資源が OYOYO ゼミにおける主な「コンテンツ」である。創立当初から OYOYO は資金繰りに余裕がなかったこともあり、筆者が正式参加した 2010 年末頃には一連の試行錯誤を経て、OYOYO メンバー自身が持つものを活用する方向で、主要な活動プログラムがほぼ出来上がっていた。

打ち合せ以外はメンバー個々の発表や企画提案が活動の中心となるため、各自が所属する多様な社会的文脈や個人的蓄積が、自然と OYOYO ゼミの活動に持ち込まれる。上記以外の活動例では、女装技術や競馬観戦の講義なども開催してきた。あまり知られていない知識や現代社会の一断面が眼前で「可視化」される体験は、参加者にはまず新鮮で、それぞれに知的興奮を呼び起こす。筆者の参与観察から振り返っても、筆者には本当は興味のないテーマの活動回も当然あったが、実際に参加してみると上記の例のようにその大半は面白かった。仕事でも趣味でも個人が真剣に愛情と時間と労力を費やしてきた技能や知識は、教養商品的な洗練などなくても、領域外の他者にも十分に面白い。むしろ領域外にいるからこそ、他者には新鮮な知識となる。発表内容が未知の領域であろうと、発表者の深い愛情や実体験を伴って語られるため、他の参加者も共感しやすく、ほとんどの活動回では発表の面白さを場全体で共有可能であった。このように「部員相互レクチャー」という活動デザインにより、メンバーの誰もが自らの固有性を他者への活動資源とすることができている。

これについて、宮崎（2013, 111～112 ページ）は「学習者を正統参加者として認めることは、趣味であれ遊びであれ、学習者の経験を既に社会を構成する価値ある活動として認めることに他ならない」と述べている。正にその意味において、メンバー達は自分の趣味や専門性、経験などを、小さな集団内ではあるが、場の多様性に貢献する価値ある「資源」として発現する機会を持つ。

また、毎回のようには講師や企画提案者が入れ替わるの

で、メンバー間の序列が固定化されなかった。他人の発表回であっても「いつかは自分の番」であるため、お互いの配慮や、相互の尊敬、対等な関係性が場の空気として自然に醸成された。

OYOYO ゼミの各種の定例活動を通じてメンバー達は、自らの体験を繰り返し「言語化」し、他の参加者に共感をもって傾聴される経験を重ねる。「あなたは〇〇だから」と他人から言われるのではない。自分の選んだ言葉で自分自身もしくは好きなものについて望むような表現で語る。それは自分の人生物語を集団の中で再構築する作業であり、体験を客観化する目線を持つことであり、人生の意味の決定権は自分にあることを再確認する時間でもある。それは往々にして「あなたは〇〇です」と一方的にラベルを貼ってくる社会に対し、「(違います、)自分は〇〇です」と自らの本来性を主張することであり、社会に対する当事者性や主体性の回復機会としても見ることができる。こうした経験は、本人に自尊心や自己効力感の増強などのエンパワメント（加藤，2015）をもたらしている。

以上のように、OYOYO ゼミはアートや趣味縁を介して、メンバー個々の多様性、固有性が集団で発現する「創造の磁場」である。ここでの活動は、発表者にはエンパワメントの契機となり、聞き手には新たな知見や交友関係などの獲得をもたらしている。つまり OYOYO ゼミは、週一回の数時間、共感をベースに相互の異質性を楽しみながら、各自の経験や趣味嗜好、特定分野の知識など、個人的なもの（資源）の「社会化」を行っていると考えられる。

2. 柔軟な組織運営と関係性の調整

OYOYO の組織形態は極めて緩やかであり、毎月の会費さえ支払っていれば、参加の仕方は自由である。創立当初は部員数の維持が固定収入の確保に直結していたため「来る者拒まず」が基本姿勢であった。創立メンバーの一人で現在 OYOYO ゼミ部長の S 氏は当時について「主催者がはっきりとした OYOYO のイメージコントロールができなかったので、たまたま誰でも受け入れるようになった」と語っている⁹⁾。

こうして OYOYO の運営は、部活制を採用したことに加え、(後述するが) 創立メンバーが即興的創発の面白さに早くから気付いて「見守る体制」に終始したため、フラットな運営構造となった。そもそもアートや趣味縁という「遊び」の領域で設立されているので、活動も採算性や効率性に囚われる必要がない。こうして冗長性の許容、多様性の歓迎、自主的で平等な関係性、望めば企画運営に

誰でも関与可能であること、などの性格がOYOYOゼミに備わっていった。

また、OYOYOゼミはアートや趣味縁による活動体であるが、そこに見られるのは、趣味縁研究の浅野(2006)が主張する、友人達と部分的に深い関係を結ぶ「選択的な人間関係」である。これに関連して、友岡(2015, 27ページ)は、OYOYOと同様、趣味縁による市民有志の都心部での活動が多発している群馬県前橋市の「前橋〇〇部」などの活動事例を、グラノベッター(1978)やフロリダ(2014)の唱える「弱い絆」やパットナム(2000 = 2006)の「橋渡し型社会関係資本」概念と比較検証しながら、「本人の自発意志のみで紐帯が形成されているために離脱に関して拘束力がない」(同, 30ページ)ことを指摘している。この拘束力のなさ、つながりの弱さこそが、OYOYOおよび前橋市の両事例において、活動の活性化や持続に肯定的に作用していると筆者は考える。

フロリダ(2014, 301ページ)はグラノベッター(1978)を引用して「弱い絆は、時間とエネルギーの投資が少なく済むので、状況に応じて使い分けることができる。弱い絆は、都市や地域のクリエイティブな環境にとって重要である。なぜなら、新しいメンバーを受け入れ、新しいアイデアを素早く吸収する必要があるからだ」と述べている。またフロリダ(2014, 300ページ)は自分の調査対象では「社会資本的な結び付きの強いコミュニティを欲している人はほとんどいなかった」とし、むしろフロリダが「半匿名社会」と呼ぶような場所を望んでいたと述べている。日本でも、NHK放送文化研究所(2015, 198ページ)が同様な報告をしている。血縁や社縁、地縁などに対して、何かにつけ相談したり、助け合えたりするような密接な関係を望む人は長期的には減少しており、あっさりとした関係を望む人が増えたというのだ(同, 201ページ)。

これらの視点から見て、OYOYOは新たな出会いの機会を多数提供しながら拘束力が弱く、社交に伴う人間関係の負荷を軽減した「現代的」な活動パッケージになっている。またコミュニティのテーマがアートや趣味縁という個人の自発意志(しかも時には変遷するのが自然とされている)であることで、メンバーに参加の流動性や「絆の程度」の制御権を担保しており、参加への敷居を下げていると考えることができる。

3. OYOYOゼミのメンバーと組織構造

OYOYOゼミでは、毎月の部費を支払い続ける者が正式メンバーである。その中には、参加はしないがOYOYOへの応援として部費だけ支払い続けている者や、

興味のある活動回のみ参加している者もいる。2015年12月現在、実際に毎週の定例会に常連参加しているゼミメンバーは10名(男性5名と女性5名)である。うちフロリダ(2002 = 2007)が主張するクリエイティブクラスの職業属性を持つものは2名で、両名ともアート系NPOの代表をしている。そのうちの一名、現OYOYOゼミ部長のS氏は、運営と活動を「見守る」姿勢をとっているため、残りの9名(クリエイティブクラス1名、非クリエイティブクラス8名)がOYOYOゼミの日常的運営を行っている。

例えば、年2回で恒例化してきた「企画展」では、メンバー数名が早くからカウントダウンカレンダーを作って進行日程を全員に共有させている。そして全員協議でテーマを決定、キャッチコピー、ロゴとイメージデザイン、出展者公募、告知、DMづくり、壁のペンキ塗り、パーティーの設定、料理メニューの選定、ライブ出演者探しなど、全員がそれぞれの得意分野を活かして企画展全体を準備する。新人メンバーであっても、参加しながら他のメンバーの運営を見ていることで、自然に企画の全体像を把握することができる「正統的周辺参加」(レイヴ・ウェンガー, 1993)となっている。

4. クリエイティブクラスによる第1のハーフシフト

OYOYOゼミ部長の前出S氏は、筆者が参与観察を始めた2010年冬時点でも、毎週の活動に欠かさず参加していた。しかし日常の活動には殆ど介入せず、家主との契約変更や企画展の方向性など重要な議案の折だけ、初期からの経験や専門性に基づいたアドバイスを行ってきた。またOYOYOゼミメンバーではないが、初期メンバーの一人で現在OYOYO代表、本業ではメディアプロモーションやイベント企画の事務所を営んでいるK氏も、見守る参加形態をとっている。K氏が経営するOYOYO併設のカフェの営業時間がOYOYOゼミの活動時間と重複することもあって、S氏と同様、出来る限り参加はするが日々の活動にはほぼ介入していない。ホールレンタルなど外部との調整が必要な時のみ、OYOYOゼミに相談を持ち込む程度である。このように初期からの幹部メンバー達は「見守る」参加に終始しており、必要な場合だけ助けながら、日常の活動と運営は現在の常連参加メンバーに委ねている。

S氏、K氏ともに、美術や音楽などで専門的な企画やコーディネートを本業としているクリエイティブクラスであるが、それに関連する分野(OYOYOゼミ)での活動にボランティア(無償)で参加している。特にS氏の場合、2014年度から北海道のある大学の教授に就任して

おり、以前にも増して多忙であるにも関わらず、OYOYOゼミへの参加を継続している。その点について筆者の質問に対しS氏は次のように回答⁷⁾してくれた（以下、関連部分のみ抜粋して引用する）。

「自分とスペースの関わり方は、ある時期から、『自分が手がけたものが、自分の手を離れ、自分でも予想しないところに転がるおもしろさ。それこそ、本物の場のクリエイティビティではないか』と考えるようになりました。自分が見たいものは、自分に新鮮さを与えてくれるものです。自分の知っていることなどどうでもいい。」

「OYOYOは、随分前から自分からコントロールをしようとしなくなりました。自分が『場』を考えると、『場』が神様なのですね。場の力が自分の知らない人を集めたり、システムを発明したりすることに気付いたからです。（中略）。例えば、（中略）OYOYOゼミやレクチャーで、講師料がなしで観客からお金を取る・・・というシステムは半分プロとしてやってきた自分やKさんには考えつかないシステムなのです。はっきり言ってありえない。しかし、やってみるとありえるということを学習しました。これは新しい経済モデルに関わっていると思う。」

上記に見るように、S氏ら創立メンバーは善意で自己犠牲的にOYOYOに時間と専門能力を提供しているのではない。彼らはOYOYOの活動に本業の見識を生かしながら、本業では「ありえない」新しい手法や知見や交友関係に遭遇しており、結果として各自の専門的な技能や創造性をブラッシュアップしている。こうした「メリット」が、彼らの無償労働に対するある種の「対価」となっている。OYOYOゼミは、制約が多く責任を伴う本業の有償労働ではないからこそ、実験的試みや自由度の高い企画が可能であり、領域横断的な表現や新たな才能との遭遇、協働作業も体験できる。

これは、敷田（2010）が指摘する「ハーフシフト」である。敷田の提唱するハーフシフトとは「主たる職場で労働しながら、それと関連する分野（隣接分野）での活動に主体的、継続反復的に参加すること」（29ページ）であり、「有償労働によって生活の維持を保障しつつ、その仕事と関連のある分野で自らの専門性を発揮して活動し、充実した時間を過ごしながら社会参加もする働き方のモデルである」（29ページ）とされる。本稿では、敷田版ハーフシフトを、次節に述べるような非クリエイティブクラスのハーフシフトと区別し対比を行うために「第

1のハーフシフト」と呼ぶ。

5. 非クリエイティブクラスによる第2のハーフシフト

本業の専門性に隣接する領域で個人が能力を発揮し、自己実現と社会参加を拡張していく敷田（2010）のハーフシフトは、OYOYOのクリエイティブクラスのみならず、非クリエイティブクラスのメンバーにおいても観察されている。例えば、本業で長年事務をしており、その職能を活用してOYOYOゼミでは経理や集金を担当する、などでの事例である。しかし、本稿が特に注目したいのは、非クリエイティブクラスのメンバー全員に見られる「現在の本業でない趣味的な専門性」からのシフトである。それは「本業の隣接分野」という敷田のハーフシフト概念をはみだしており、筆者はそれを新たに「第2のハーフシフト」として拡張して考えた。

この第2のハーフシフトとは、本業ではないものの、本人にとって重要である職業外の技能や専門性、趣味嗜好など内的な資質からの「シフト」である。例えば、元プロカメラマンの主婦メンバーは、OYOYOゼミでの各種会場設計や記録写真等でその技能を発揮している。また、イラストレーター志望のあるメンバーは、ネット投稿やコミックマーケットへの出展を続けており、いずれは本業のイラストレーターに「フルシフト」するかもしれない。しかし本業へのシフト如何に関わらず、当人達は自分の創造性や趣味での専門性、人生経験で得た技能などを価値ある形で社会に活かし共有したい、と考えている。筆者が注目するOYOYOゼミの非クリエイティブクラスのシフトには、このような本業での専門性に関わらない働き方が含まれている。つまり、本業の専門性を活かした隣接分野へのシフト（敷田版ハーフシフト）ではなく、趣味やかつての本業からのシフトによって、潜在化させている技能や創造性を発揮し、有償労働以外の形で社会的価値化を行いながら、拡張的に自己実現と社会貢献を実現する姿である。OYOYOゼミの事例に則して述べれば、各自が趣味の専門性や技能を無償の副業（OYOYOゼミ）の場で創造的に発揮しながら（筆者が提唱する第2のハーフシフト）、同時に（就労者の場合は）本業の有償労働を継続している。

こうした働き方は従来、本業の軽視もしくは趣味のための労働とされて、批判の対象になってきた。敷田（2010）の論考でも、あくまで本業の維持が前提である。しかし、本業での自己実現が難しい現在、「非創造的な有償労働」で生計を維持しつつ、一方でOYOYOのような自由空間を活用して創造性を発現させていくような働き方が、改めて見直される必要があるのではなかろうか。現在の労

働環境では非創造的な労働現場が多く、個人が創造的な労働現場を選ぶには限界があることを、議論の前提とせざるをえないからである。

この点に関して敷田(2010)は、職場の労働環境の変化を次のように論じている。「1990年代前半までは、有償労働の場は、仲間と過ごせる『共同体のような場』と収入で生活を維持できる安心が混在した魅力があった。しかし、1990年代後半から『準共同体的企業』であった日本企業が解体し始め、2000年代に入ると、グローバリゼーションの中で企業自体の維持だけが主な関心事となった。そのため、共同体的な意味を失った有償労働の場、つまり職場への失望が労働側に生じた」(敷田, 2010, 30ページより抜粋まとめ)。

このように職場環境や労働条件が、労働者個人にとって好ましくない状況に変化してきたことは、日本経済新聞の記事「長時間労働ニッポン」⁸⁾(2015年)や、世界主要30ヶ国の中で唯一労働コストが下降し続ける日本の実態を示したOECDの統計「Productivity and ULC By Main Economic Activity」(1999～2012年のデータ)⁹⁾ほかで詳しく見ることができる。生産性向上のための効率的で合理的な労働の追求が、かつて職場が担っていた社会のセーフティネットを解体し、自己責任を原則とする個人間競争を加速させてきた(山口ほか, 2006, 11ページより抜粋まとめ)。敷田(2010)は「職場だけが唯一の自己表現や社会参加の場になっていることで、事態はより深刻になっている」(同, 31ページ)と指摘する。

そうした現代の職場において、趣味や専門性を迂闊に披露することは、鬱陶しがられたり、個人間競争において足を引っ張られる原因にすらなりかねない。特にそれが、新奇性が高い場合や社会的認知が低い領域にある場合は尚更である。しかし、職場で求められる労働商品としての自分だけが人のすべてではない。個人が興味を持ち、好んで維持している特技や技能には、本業での必要性からは零れ落ちる余剰部分が当然ある。それらは職場以外で社会に活かす場があれば、個人の趣味には終わらずに再び社会の資源となっていく。だが現実には、こうした能力の多くは「無駄な専門性」として潜在化されざるを得ない。これは社会的には貴重な「能力の仮眠状態」であり、また、それが社会的に認められない状態は、本人の本来の固有性の否定となり得る。

そこで、本業の専門性を副業に転用する敷田(2010)の主張した「第1のハーフシフト」に加え、筆者は個人的な趣味や技能を無償の副業で活かす「第2のハーフシフト」を新たに提案する。OYOYOゼミの活動事例は、彼らの潜在的な技能や専門性を、アートや趣味縁の場に

おいて外在化¹⁰⁾し、社会の中で共有し、承認する場として機能していると言える。そこでは、クリエイティブクラスも非クリエイティブクラスも週1回の数時間、全員が創作や企画などの創造的な活動を楽しむ。特に非クリエイティブクラスのメンバーは、あくまで一時的にはあるが、クリエイティブクラスが本業で行っている「意義のある新しい形態を作り出す」(Florida, 2014, p.56)創造主体として社会の中に立ち現れる。それは本業では発揮できない「余剰」の能力や創造性の解放であり、個々の「全人性の回復」である。同時に、定住人口に対する交流人口のような形で、クリエイティブクラス人口を一時的に厚くしている。そして敷田(2010)がハーフシフトの効用として言及する「有償労働の場で失われた『共同性』の回復機会」(同, 31ページより抜粋まとめ)でもあるが、アートや趣味縁という個人的、非固定的な領域にあることにより、前近代的な束縛の強い共同体となることが回避されている。

結論として、OYOYOゼミは、前章で挙げたような平等性、発言発表の自由と安心感、冗長性の許容などの性格を併せ持つことにより、職場や日々の生活圏では発揮しにくかった(一般的には)特異な専門性や技能を本人が望む形で発現させる「創造の磁場」となっていると考えられる。創立メンバー達の第1のハーフシフト同様、非クリエイティブクラスのメンバーは第2のハーフシフトを通して、本業では潜在させざるを得ない自らの技能や創造性を自由に発揮し、活動への評価を楽しみ、自己肯定感や自己効力感を高めている。メンバーは、各自の個人的楽しみを集団で最大化している。そうした活動は、単なる個人的な娯楽にとどまらず、彼らの潜在能力を社会的に価値化する受け皿として機能している。また、OYOYOの人気企画では一晩で50人強が動員されており、周辺の通行量増加や長期空室の解消なども起きていて、地域活性化への貢献や社会的価値にも結びついている。

このように、第2のハーフシフトは、フロリダ(2002＝2007)が「すべての人はクリエイティブである」と語ったことを実現する有効な手段である。

IV まとめ

労働環境の劣化が深刻な現代日本において、市民の創造性を指標化するにあたり、職業分類だけでは補足できない部分のさらなる増加が想定される。本稿では、筆者が非クリエイティブクラスと名付ける社会層の一部が、アートや趣味縁の拠点であるOYOYOゼミに定期的に集い、各自が潜在させてきた創造性を発揮し全体で磨き上げていくメカニズムを、敷田のハーフシフト概念(2010)

を發展させる形で説明した。敷田が提唱した本業の専門性の隣接領域で行われる「第1のハーフシフト」に対し、筆者は、本業ではないが本人の趣味や専門性など内的資質の隣接領域で副次的に行われる活動を「第2のハーフシフト」として提言した。つまり、個人が本来的に持っている資質や専門性を、本業で生計を維持しつつも、それ以外の形で社会的に実現する形態にまで拡張してハーフシフト概念を捉え直している。

本稿が報告するようなアートや趣味縁の場での市民有志による非営利活動のアウトプットは、クリエイティブクラスの本業のように産業生産に直結してはいない。しかし、非正規雇用が全労働人口の4割を超えるような現在の日本の労働環境においては、クリエイティブクラス人口を増加させるのと並行して、非クリエイティブクラスの創造性を活性化することが、本人のみならず地域全体にとっても重要課題である。

紙幅の関係でここでは触れることが出来なかったが、アートや趣味縁の拠点がクリエイティブクラスと同時に非クリエイティブクラスの創造性を活性化させる「創造の磁場」となることは、OYOYOのみならず群馬県前橋市の前橋〇〇部の事例の一部でも観察されている¹⁾。ある種の条件を備えたアートや趣味縁の場は、非クリエイティブクラスの創造性を活性化する磁場として有効である、というのが筆者の仮説であり、これについては今後の研究課題として、新たに事例検証と分析を發展させたい。

<謝辞>

調査にご協力いただいた歴代OYOYOゼミメンバーの皆様、OYOYO関係者の皆様、第2三谷ビルの歴代入居者の皆様、株式会社ノーザンクロス様、アルファコート株式会社様、北海道大学の質的研究ゼミの皆様、前橋〇〇部の皆様、ジョウモウ大学の皆様、群馬県文化関係者の皆様に、この場を借りて篤く御礼申し上げます。特に本研究に貴重な示唆を下さり、2014年の群馬県でのフィールド調査を全面的に応援して下さいました友岡邦之先生に感謝申し上げます。また、筆者がOYOYOの事例から分析した2種類のハーフシフトについて、オリジナルのハーフシフト概念の応用を快諾して下さいました北陸先端科学技術大学院大学の教授の敷田麻実氏にも感謝申し上げます。敷田氏との刺激的な議論からは、本稿の執筆にあたり多くの示唆をいただきました。

注

1) 2015年12月現在、日本でも神戸市（デザイン）、

名古屋市（デザイン）、金沢市（工芸）、札幌市（メディアアート）、鶴岡市（食文化）、浜松市（音楽）、篠山市（工芸）の7都市がユネスコの認定を受けている。

- 2) 札幌市中央区南1条西6丁目 第2三谷ビル6階の南面に入居。
- 3) その推移は、各種の地価データや札幌市商店街振興組合連合会の『札幌市都心商店街通行量調査』などに見ることが出来る。
- 4) 2011年10月18日、(株)ノーザンクロスの酒井秀治氏（OYOYO設立の中心メンバーの一人）へのインタビューより。
- 5) 初期段階では定例活動日に「ただ何となく集まっていた」時期もあったが、多忙な社会人メンバーが多い中、週一回の活動時間を有効活用するために、徐々に事前に活動内容を決めるようになった。
- 6) 2014年8月21日に筆者は当時のOYOYOゼミ部員全員にアンケートを行った。その際の自由記述欄の記入について、筆者の補足質問に対しS氏が2014年12月11日にメールで回答してくれたもの。
- 7) 上記6)に同じ。
- 8) 「長時間労働ニッポン 欧米にない3つの土壤、14年間の正社員残業、173時間で最長に」（2015年3月23日電子版）。http://www.nikkei.com/article/DGXLASFS20H7P_Q5A320C1NN1000/
- 9) OECD “Unit Labour Costs - Annual Indicators” Real Unit Labour Cost1999 = 100 https://stats.oecd.org/Index.aspx?DataSetCode=ULC_ANN (2016年1月4日最終閲覧)。
- 10) ここでいう外在化とは、ナラティブ・セラピー等の文脈で用いられる「問題と本人を切り離す」意味での「問題の外在化」ではなく、情報を記憶に留めるのみならず様々な記録媒体やコミュニケーションによって他者と共有できる形で本人から社会に還元する意味での外在化として用いている。
- 11) 2014年9月の10日間、筆者は群馬県で前橋市を中心に都心の商店街を市民がアートや趣味縁で活用している拠点を中心に現地調査を行った。

参考文献

- 浅野智彦『趣味縁からはじまる社会参加』岩波書店、2011年。
- Florida, Richard L., *The Rise of the Creative Class : and How It's Transforming Work, Leisure, Community and Everyday Life*, New York:Basic Books, 2002.（井口

- 典夫訳『クリエイティブ資本論—新たな経済階級の台頭』ダイヤモンド社, 2008年.)
- , *The Rise of the Creative Class Revisited : 10th Anniversary Edition Revised and Expanded*, New York: Basic Books, 2012. (井口典夫訳『新クリエイティブ資本論—才能が経済と都市の主役となる』ダイヤモンド社, 2014年.)
- Granovetter, Mark., "The Strength of Weak Ties," *American Journal of Sociology*, Vol.78, No.6, 1973, pp.1360-1380. (大岡栄美訳「弱い紐帯の強さ」野沢慎司編・監訳『リーディングスネットワーク論：家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房, 2006年.)
- Jacobs, Jane., *The Death and Life of Great American Cities*, Vintage; New York: Random House, 1961年. (山形浩生訳, [新版]『アメリカ大都市の死と生』, 鹿島出版会, 2010年.)
- , *Cities and the Wealth of Nations: principles of economic life*, New York: Random House, 1984. (中村達也訳『発展する地域衰退する地域—地域が自立するための経済学』ちくま学芸文庫, 2012年.)
- 加藤康子「アートを核としたコミュニティに見られる『生きづらさ』を乗り越える契機とエンパワメントについて—札幌のOYOYOゼミの事例から—」『国際広報メディア観光学院ジャーナル』, 第20号, 2015年, 35-54ページ.
- Lave, Jean and Wenger, Etienne., *Situated Learning : Legitimate Peripheral Participation*, New York: Cambridge University Press, 1991. (佐伯胖訳『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加』産業図書, 1993年.)
- 宮崎隆志「『中間地帯』の再建による社会空間の変容」日本社会教育学会60周年記念出版部会編『希望への社会教育』東洋館出版社, 2013年.
- NHK放送文化研究所『現代日本人の意識構造(第八版)』NHK出版, 2015年.
- 長田進「創造都市論の議論に関する一考察」『慶応義塾大学日吉紀要 社会科学』第21号, 2010年, 93-104ページ.
- Putnam, Robert. D., *Bowling alone : The Collapse and Revival of American Community*, New York: Simon & Schuster, 2001. (柴内康文『孤独なボウリング—米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房, 2006年.)
- 敷田麻実「専門家の創造的な働き方としてのハーフシフトの提案：科学技術コミュニケーターとしての隣接領域での無償労働」『科学技術コミュニケーション』第8号, 2010年, 27-38ページ.
- 札幌市商店街振興組合連合会『札幌市都心商店街通行量調査』2011年, 2015年.
- 佐々木雅幸『創造都市への挑戦—産業と文化の息づく街へ』岩波書店, 2001年.
- 「創造都市研究の現段階と課題」『経済科学通信』第130巻, 2012年, 46-53ページ.
- 「包摂型創造都市・大阪」『都市文化研究』, 第17巻, 2015年, 119-128ページ.
- 友岡邦之「地域振興団体における領域横断性と『中庸のネットワーク』：群馬県の事例にみる新しい組織論的特性の分析」『地域政策研究』第17巻第4号, 2015年, 19-31ページ.
- 山口二郎編「『強者の政治』に対抗する！」岩波書店, 2006年.